国際研究論叢　18（3）：63〜69，2005

大学における導入教育の一事例
ー大阪国際大学経営情報学部「日本語表現」の取り組みー

河口　充勇*

A Case of the Freshman Seminars in College Education: “Japanese Expression” in Osaka International University

Mitsuo Kawaguchi*

Abstract

This short paper discusses the actual situation of freshman seminars in college education through the experience of “Japanese Expression” in Osaka International University. The course has three main themes: orientation for college life, training in basic learning skills, and orientation for social life after graduation. For the last three years I have been managing my course on the basis of two mottoes: “easy-going but high quality” concerning the choice of teaching materials and “emotional intelligence” concerning personal communication with students. Such seemingly contradictory ways of thinking are indispensable in experiments in freshman seminar education.

キーワード

導入教育、「敷居は低く、質は落とさず」、「温かい知性」

freshman seminars、“easy-going but high quality”、“emotional intelligence”

１．はじめに

今や導入科目（アメリカでは一般にfreshman seminar）あるいはリメディアル（補習）科目などと称される新一年生対象科目は大学関係者の間でよく知られるものとなっている。しかし、筆者が非常勤講師として大阪国際大学経営情報学部に設置された「日本語表現」という導入科目を担当することとなった2002年４月の時点では依然として“知る人ぞ知る”的な存在であった。大阪国際大学における導入教育は1999年に始まっており、日本の大学のなかでは先駆的存在であったといってよい。それゆえ、多くの大学で導入教育が

＊かわぐち　みつお：大阪国際大学経営情報学部非常勤講師〈2004.12.15受理〉

始まる2001年から2003年にかけての時期には、大阪国際大学「日本語表現」は先駆例として注目を集め、関連雑誌の取材[1]や他大学からの講演依頼を受けることになった。その意味で当科目は日本における大学導入教育の最前線を歩んできたといっても過言ではないだろう。

本稿では、大阪国際大学経営情報学部「日本語表現」の取り組みを紹介しながら、大学における導入教育のスキルと理念に関する私論を述べたい。

２.「日本語表現」の特色

2004年末現在、経営情報学部「日本語表現」は新１年生全員を対象に、履修義務をともなう選択科目として開講されている。１クラスおよそ50人程度のサイズで、全６クラスから構成されている。1999年度における全学カリキュラム改正の際に、経営情報学部教務委員会の提案がきっかけとなり実現された科目であり、開講初年度のみ法政経学部・経営情報学部の両方にまたがる当時の全学共通科目として、非常勤講師１名の担当でスタートしたが、翌年度からそれぞれの学部事情に合わせた両学部別運営の形態に移行し、現在にいたっている。2000年度より現在まで経営情報学部「日本語表現」６クラスは専任教員１名（小瀬木えりの助教授）と非常勤講師２名が担当してきた。非常勤講師採用時には、①声がよく通ること、②柔軟な発想で教育内容を工夫できること、③出席や成績のデータ管理の必要上、また学部の教育特性に基づき数値データを扱う分析能力を備えていること、そして④「温かい知性」を備え、勉学が苦手な学生に共感できる能力のあること、といった条件が重視されてきた。

「日本語表現」は、立ち上げ当初、近年の大学生の学力低下に対応した「リメディアル科目」という位置付けでスタートしたが、実際の運営の過程で、単に学力低下の問題だけに対処するのでは不充分であることがしだいに明らかになった。新入学生の学力低下はより大きな問題の氷山の一角にすぎず、その背景において精神的な未熟さや社会性の欠如などのより大きな問題が絡んでおり、学力低下とあいまって大学での教育が浸透し難い状況が生まれていることが、担当者の取り組みの中で切実に感じられてきたのである。このような背景から、「日本語表現」においてリメディアル（補修）も含むより包括的な概念である「導入科目」としての性格が強まっていった。導入科目は、単なる学力不足を補うリメディアルから一歩進み、高校生気分の抜けない新入生に対して大学生活に早く適応できるよう様々な指導・教育を行ない、より成熟した大学生へと育てること、そしてまた、大学卒業後には社会人として大人の世界に円滑に参入できるよう、社会性の陶冶にも助力する役割の科目である。以上のような事情から、「日本語表現」が掲げる教育目標は、①「大学への導入」、②「基礎的学習技能の養成」、③「社会への導入」の３本柱からなる。

上記①の「大学への導入」には、大学というシステムに無知な新入生が円滑に大学の授業や生活に適応できるよう、時宜を得たオリエンテーション、大学のシステムに関する解説、学習に対するエンカレッジなどの内容が含まれる。新入生オリエンテーションは大学の公式行事としてももちろん実施され、１年生セミナークラスでも各担当教員が折々熱心に指導している項目であるが、高校とのシステムの大きな違い（例えば、単位制度や、授

業出席や成績の基本的自己管理の必要、大学教員の仕事や役割に関する認識など）に無自覚な最近の学生たちは、４年間を通じての大学のシステムの全体像について新学期に一度解説を受けただけでは十分に理解できず、また、実際の必要に迫られない限り真に納得することなく過ごすため、無知が原因でさまざまな問題が生じる。そうした問題に対処するには、やはり年間を通じた地道な教育指導が不可欠である。しかも、１科目だけでその役割を担うより、複数科目、複数の担当者が相乗的に指導する方がより浸透度が高まり、早く効果を挙げ得る。

上記②の「基礎的学習能力の養成」とは主として大学での学習に必要不可欠な読み・書き・話すための日本語表現力の養成であり、実際には「日本語表現」の授業時間のほとんどがこれに費やされる。昨今の若者は漢字をはじめ、言葉の基礎知識や運用能力において著しい低下を示している。そのため、新入生の自主性に任せおいては授業に出席しても講義ノートを取ることができないし、演習科目などで発表を行なう際にレジュメをつくることも資料を用意することもできないし、レポート課題を出されても自力で書くことができないし、論述試験の際にも回答を構成し書くだけの表現力をもたない。そうした問題に対処するため、「日本語表現」では、前期には文章のまとめ方、講義ノートの取り方、論述・レポートの書き方に関する解説・実践指導を行なっている。さらに、後期には数値データから有意味な現象やその変化を読み取り、それをわかりやすい文章で表現する練習を中心に、口頭発表の指導も行なっている。

上記③の「社会への導入」とは、学生たちに大学を卒業した後の展望をもたせるためのものである。これまで「日本語表現」では、外部講師（就職指導の専門家など）を招いて講演会を行なったり、通常授業時に担当者が自己の進路選択に関するエピソードを話したりすることで学生たちの社会化をエンカレッジしてきた。また、授業で用いられる教材にも時おりそのような「社会への導入」を意識した内容のものを取り入れてきた。先の「基礎的学習能力の養成」に比べ、そうした社会化エンカレッジの試みがどれほどの効果を挙げてきたのかは客観的に測りがたいし、短期間に効果が表れるものでもない。実は先の三本柱のなかでこれが最も難しい課題であり、担当者には相当程度の想像力と忍耐力が求められる。なぜ高校生のままではだめなのか、なぜ大人にならなければならないのか、大学とは何のためにあるのかといった多くの学生たちが潜在的にもっている根本的な問いかけに対して「きれいごと」や「常識」をならべたてたところで誰も聞く耳をもたない。ここで求められるのは学生たちへの共感であり、それに基づいた「大人の知恵」の提供である。この点については後節で詳しく述べる。

以上のような特色をもつ「日本語表現」の担当者として筆者が現場で常に意識してきたことは、教材選びに関する「敷居は低く、質は落とさず」という理念、そして、学生たちとのやり取りに関する「温かい知性」という理念である。以下では、筆者自身の経験を基に、それらの意味するところを述べる。

３．「敷居は低く、質は落とさず」

先述のように、「日本語表現」の授業時間のほとんどは「基礎的学習能力の養成」トレ

ーニング（具体的には、文章のまとめ、講義ノート取り、論述・レポート、数値データ読解、口頭発表などのトレーニング）に費やされるが、筆者が「日本語表現」の担当者となった2002年４月時点では、そうした「基礎的学習能力の養成」に関する教科書は全く充実していなかった。結局、筆者は前任者から引き継いだ教材を部分的に踏襲しつつ、試行錯誤のなかで自らの教材ストックを増やしていった。その際に重視したのが「敷居は低く、質は落とさず」という理念にほかならない。大学で使われるべき教材に関する「常識」に固執せずに、より柔軟な発想から、学生たちのニーズに合わせて、彼らにとってリアリティのある身近な教材をあえて使用してきた。とはいえ、低いのは入口の敷居だけにし、慣れてくれば教材の難度、作業の難度を徐々にあげてゆくという方法をとってきた。その点、社会学という現代の若者のライフスタイルや意識に関する話題を豊富に備えた領域を専門とし、かつ学生たちとさほど年齢の変わらない筆者は有利な立場にあったといえる。

実際に筆者が「日本語表現」の授業で用いた教材について簡単に述べると、たとえば、文章まとめの練習用教材として一般読者向けのエッセー、そして、講義ノート取りの練習用教材としてテレビのバラエティ番組を用いた。そうして、いったん学生たちが作業に慣れてくれば、用いる教材をより学術的な、学生たちにとってあまり身近ではないものにシフトさせた。そのような段階的トレーニングは、非常に手間がかかるものの、確実に成果が上がる方法であるといえる。

また、数値データの読解練習の際にも、「常識」に固執せずに、たとえば、コンビニエンスストア、ヘアカラー、携帯電話、喫煙、持久走タイムといった多くの学生たちにとって非常に身近な素材を用いて、彼らの数字に対する恐怖心・無関心を解くよう心がけた。最終的には、「M字型曲線」で知られる日本女性の労働力率のような学術性の高い数値データであっても十分にその背景を想像し、論理的な説明を行なえるところまでもっていくことが可能になる。

くわえて、筆者の授業では口頭発表のトレーニングにも力を入れ、話す内容だけでなく話し方（発声やボディランゲージ）に関する指導も丹念に行なってきた。プレゼンテーション技術の養成は「社会への導入」という課題とも大いに連関している。そこでは、総じて人前での自己表現を恐れる学生に対して恐怖心を振り払い、プレゼンテーション能力が近い将来の就職活動時やその後の社会人生活の中で、あるいは今日・明日にでも学生たちが遭遇しうるアルバイト面接のような場で、いかに重要な意味をもつかについて筆者自身の経験を踏まえながら説明を行なってきた。

「敷居は低く」ということについて一点補足すると、筆者の授業では、できるかぎり頻繁に学生たちの作業のなかから生まれる成功例を匿名で公表してきた。そうすることで、「教員だからできる」のではなく「努力すれば誰でもできる」と学生たちに実感させるよう努めてきた。

また、「質は落とさず」ということについても一点補足すると、筆者の授業では、単なる読み書き計算のリメディアルに終始するのではなく、できるかぎり「物事を考える楽しさ」という学術の基本を伝えようとしてきた。そうすることで、基礎的学習能力の養成が主体的な思考力の向上と結びつくよう努めてきた。導入教育は、学生たちに対して、彼ら

のほとんどが嫌悪する地道な積み重ねの作業を強いるものであり、そこに「物事を考える楽しさ」というインセンティブがなければ、やはり大きな成果は望めないのである。

そのような「物事を考える楽しさ」を学生たちに実感させるための機会を提供するということは、次に論じる「温かい知性」という理念とも大いに関係している。

４.「温かい知性」

本来、大学教育とは、何より学生の主体性、自由意志を尊重するものであり、「大学生とは大人である」ということを前提としたものである。しかし、今日の大学導入教育の現場においては、そうした前提に固執することは危険であり、むしろ多くの大学生は学ぶことに対する主体性をもたない、「多くの大学生は子どもである」ということを出発点における前提としたうえで、段階的に基礎的学習能力を養成しながら、学ぶことに対する主体性の向上を図っていくほうがより多くの効果を生むことになるだろう。その場合、従前の理想（自由放任）への過剰固執と同じように、目前の現実への過剰同調（節操のない過剰な介入、得てして敷居だけでなく質まで落ちてしまう）もやはり望ましいものではない。そこで望まれるのは、「温かい知性」を前提とした適度な人格的コミットメントにほかならない。

そうした人格的コミットメントは日ごろの些細なやり取りの積み重ねのうえに成り立つものである。たとえば、筆者の授業では授業開始前の５分と終了後の５分を学生たちとのインフォーマル・コミュニケーションに割いてきた。そうしたコミュニケーションを通して学生たちの関心事を引き出し、それを授業の「枕話」に利用してきた。特に前期の前半においてはそのようなコミュニケーションが学生たちとのラポール構築において大きな意味をもった。

また、「日本語表現」では実習科目ゆえ作業の時間が多くあるが、そうした時間においてはできるかぎり学生個々に接近し、教室におけるコミュニケーションが一方通行にならぬよう心がけてきた。

くわえて、筆者は自身のEメールアドレスを学生たちに公開し、彼らから送られてくるEメール（たいてい欠席の連絡）は些細な要件のものに関してもリプライするよう努めてきた。特に一年生の後期という時期は、入学当初にもっていた大学生活に対する希望が非現実的なものであったことを思い知り、それと同時に緊張感が緩み不安感が高まる時期である。実際、筆者のクラスでは、その時期になって急に授業に出席しなくなる者、出席しても積極的に授業に参与しない者が多くみられた。そうした学生たちのなかから毎年数名が脱落することになったが、それと同時に何らかのSOSサインを筆者に向けて出す者もいた。その場合、よく用いられるツールがEメールである。以下にあげる指導学生A君とのEメール上でのやり取りはそのあたりの事情を極めて象徴的に示すものである。

A君からのメール

最近家にひきこもってて、大学やめるかやめないか迷ってるんです…今日の授業は休ましてもらいます、すいません。

筆者の返信
引きこもりですか。僕も経験があるからわからんでもないけど、結局、引きこもりって、しんどいことを後回しにするだけで、いいことなんて何もないよ。学校が楽しくないのは僕もそうやったからよくわかるけど､学校なんてそもそも面白い所であるわけがない。自分で楽しいことを積極的に探せない人間であるかぎり、どこにも面白い所なんてないんよ。そうでない人間で楽しそうに見えるやつは、ただの見せかけ。大学を辞めるのは簡単なことですが､“積極的”に辞める理由がありますか？　あるなら、止めません。ないなら、早まってはいけません。

A君の返信
あ～先生もあるんですか！！積極的にやめる理由はないんですけど…学校に行きづらくて。もう一回よく考えてみます。心配してもらってありがとうございます。僕って日本語表現の出席どうなんですかね？

筆者の返信
君の出席は足りています。ちゃんと試験で結果を出してくれれば、だいじょうぶです。悩んでいるときは、家にこもらないほうがいい。引きこもると、精神だけでなく、肉体的にもコントロールきかなくなるから。新しいバイトとか探してみれば？　何でもいいし何か一生懸命になれる、没頭できるものが必要なんよ。それがあれば、どんなに忙しくても、貧しくても、人間というのは生きていけると僕は思う。君の巻き返しを期待してます。よいお年を。

A君の返信
そうですか、それはよかったです。先生に言われたとおりにがんばって家からでることにします。新しいバイトとか自分のやりたいこともがんばって探してみます。これだけ心配してくれるのは本当に嬉しいです、ほんまのほんまに嬉しいです。マジですんげぇ嬉しいです。ありがとうございます。先生も良いお年を☆★

以上のようなメール上のやり取り（一時間程度）があった日を境に、A君はまるで人格が変わったかのように真剣な態度で授業に参加するようになり、結局、期末試験でも好成績を収めることとなった。そのようなやり取りはA君との間に限ったものではなく、過去３年間に延べ７、８人の学生と同様のやり取りを経験している。そうした学生たちが筆者に求めたものは、同情ではなく、彼らの置かれる境遇に共感したうえで、ほんの少し高いところから行なう道先案内であったのだろう。

５．おわりに

先述の「敷居は低く、質は落とさず」も「温かい知性」もともにパラドキシカルなフレーズである。敷居を低くすれば質も落ちてしまうのが「常識」であろうし、知性というも

のは冷たいものであるのが「常識」であろう。とはいえ、そうした「常識」はずれの発想がなければ、大学の導入教育が実を結ぶことはありえないのではないだろうか。なぜなら、大学の導入教育という存在自体がそもそもパラドキシカルなものであり、その発展には当然のことながら脱常識的発想に基づく地道な試行錯誤の積み重ねが不可欠なのであるから。

注

(1)『Between』No.176（2001年７月）に関連記事が掲載。